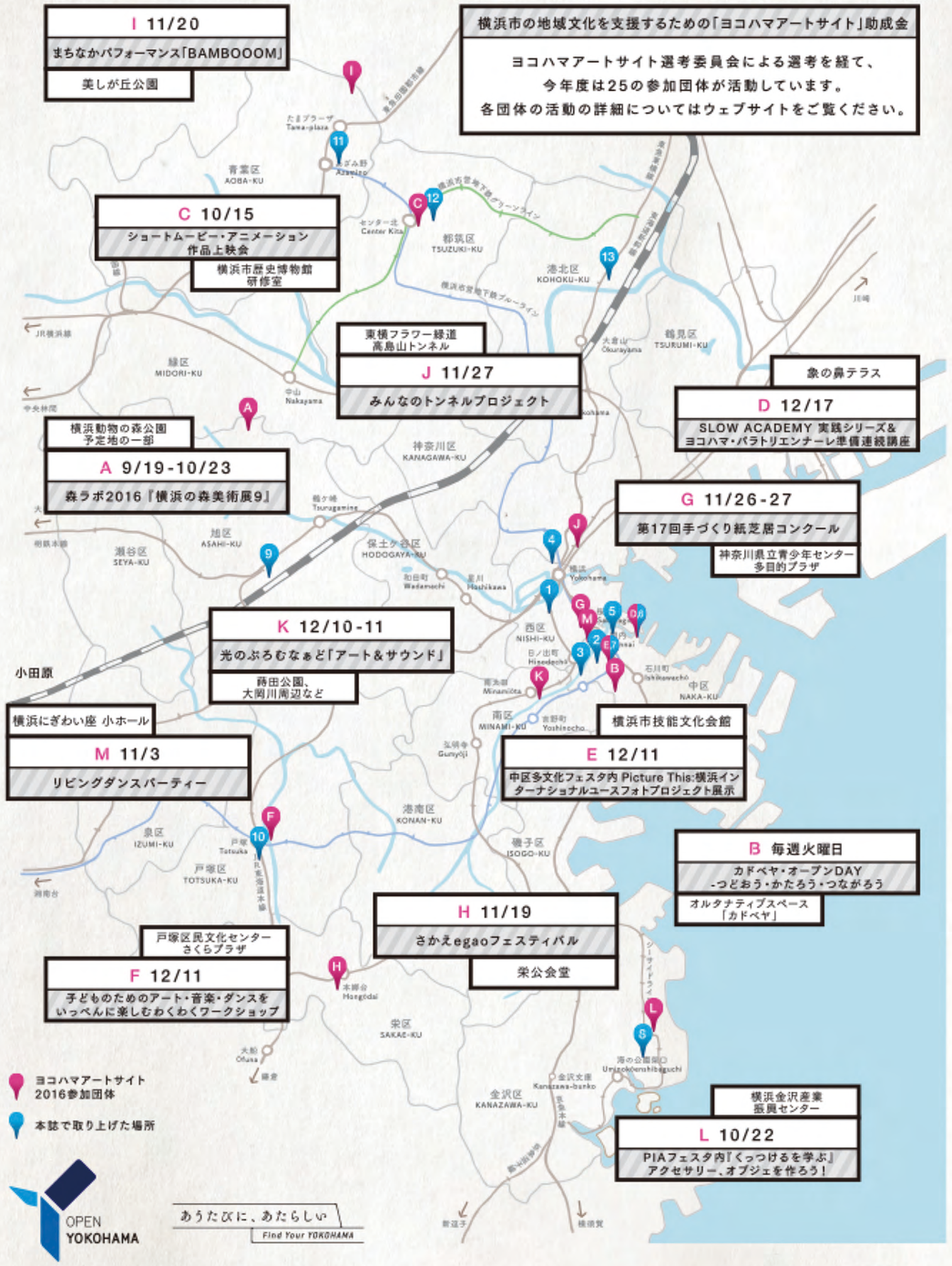
YOKOHAMA ARTSITE

ヨコハマアートサイト　おでかけMAP

横浜市の地域文化をサポートするヨコハマアートサイト2016参加団体による
10月〜12月のイベントをピックアップ。ぜひ、おでかけの予定に加えてほしいものばかりです。

横浜市の地域文化を支援するための「ヨコハマアートサイト」助成金

ヨコハマアートサイト選考委員会による選考を経て、
今年度は25の参加団体が活動しています。
各団体の活動の詳細についてはウェブサイトをご覧ください。



最新情報・詳細はこちら　http://www.y-artsite.org/　ヨコハマアートサイト

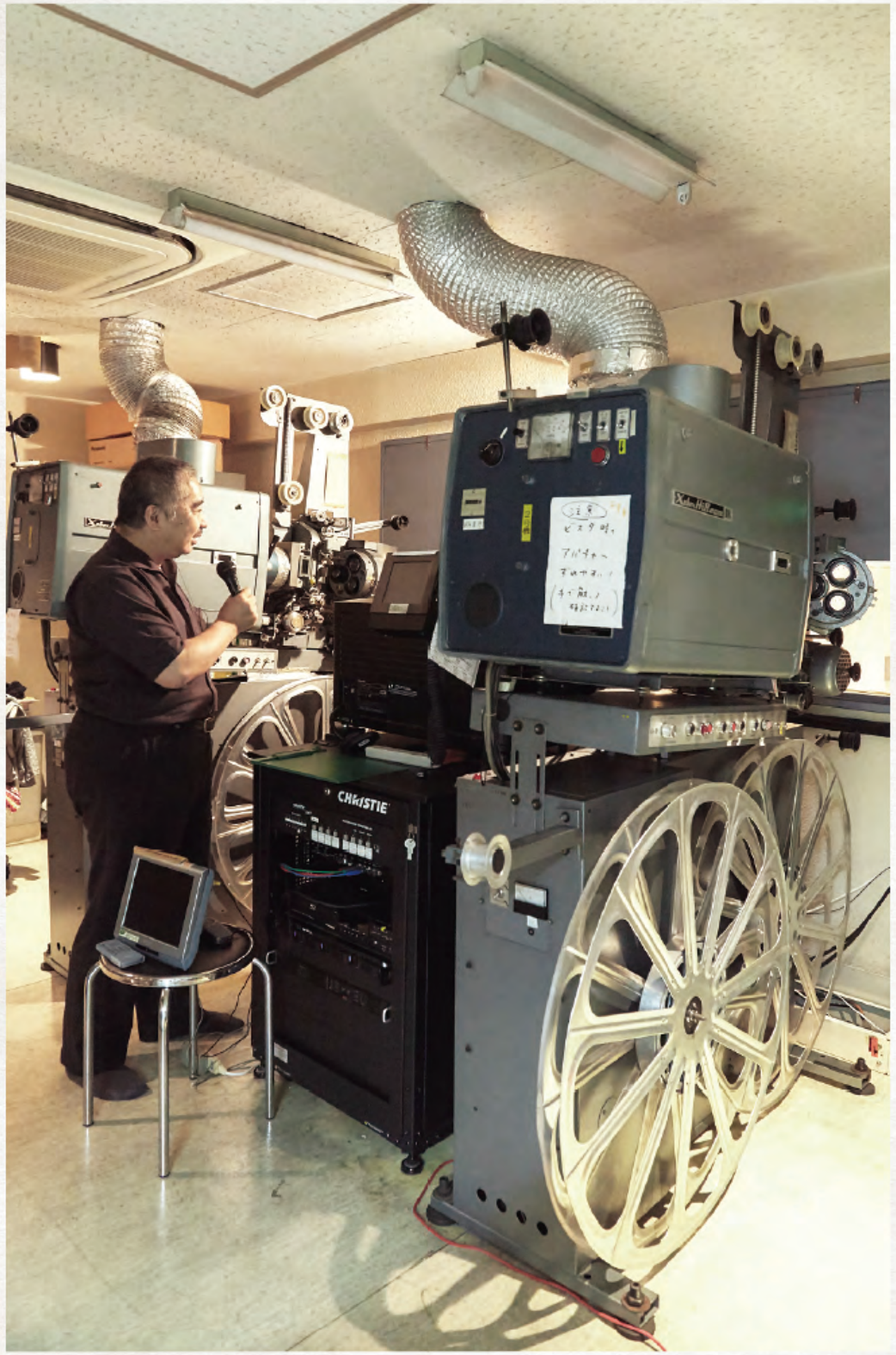
ヨコハマアートサイト

横浜の地域文化を考える・応援する

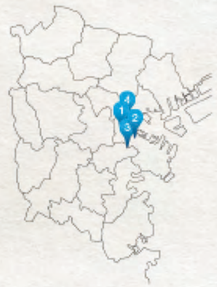
西区・萬歳湯「横浜・藤棚シネマアートフェスタ2016」

2016 Vol. 009

「特集　よりみち映画館」



右　中区・シネマジャック&ベティ「ヨコハマらいぶシネマの音声ガイド」／P.2　西区・萬歳湯



特集　よりみち映画館

映画館を出た後は
気付くと
歩き方まで変わってる

ある夏の夕方 銭湯の浴室に響く 16ミリフィルムの回る音

日が暮れはじめ、住宅地に夕飯のにおいが漂う中、一人また一人と西区の銭湯・萬歳湯にやってくる。のれんをくぐると、浴室から脱衣所まで椅子がずらり。中央には2台の映写機が長机に置かれている。昭和の風情を残す藤棚商店街を、昭和に隆盛した映画と映画ポスターで盛り上げるという、映画館を持つ商店街ならではの取組「横浜・藤棚シネマアートフェスタ2016」プログラムのひとつ、「無声映画『月世界の女』活弁・生演奏付上映会」だ。映写機を操作するのは近隣の映画館シネマノヴェチェントの箕輪克彦さんだ。「銭湯で落語をやっているのを見たことがあって、落語ができるなら映画もできるだろうと」。

横浜で初めて映画が上映されたのは1897年。フランスでリュミエール兄弟が映画の原型となるシネマトグラフを公開した2年後のことだ。その後、明治末に映画館というものが出来るまで、映画は芝居小屋や寄席で上映されていたという。観客が浴室のタイルの上に腰を下ろし、肩を寄せ合って座っている様子は、なるほど当時の芝居小屋を連想させる。

映写機がカタカタと音を立て、モノクロ無声映画「月世界の女」を映し出すと、活弁士のコミカルな語りとジャズバンドの生演奏が銭湯内に響き合う。「昔はこのあたりにもいくつか映画館があったそうだけど軒並み潰れてしまった。萬歳湯は、このまちの移り変わりをずっと見てきたんですよね」。

横浜・藤棚シネマアートフェスタ2016開催中は「ランボー」や「サスペリア」などのポスターデザインを手がけたデザイナーの檜垣紀六さんのポスターを商店街に展示。日々の暮らしの中に、映画文化が溶け込む一週間となった。

2 歴史を受け継ぐ映画館 地域の中に あるからこそできること、やるべきこと

伊勢佐木町エリアには横浜の映画文化を支える三つの映画館がある。横浜ニューテアトル、シネマ・ジャック&ベティ、そして横浜シネマリン。三館をはしごするために他県からやってくる常連客もいる。横浜シネマリン代表の八幡温子さんも元々、横浜の映画館ファンだった。「以前はもっと映画館があったんですよ。いつだったか封切り映画を見に行ったら受付で真珠を一粒もらったんですけど、

帰りにネックレスに加工出来ますよって言われて、それは有料なんです(笑)」。地域の中心に映画館があった時代の逸話だ。

7月には、映像グループローポジション10周年記念・特集上映『ハマのドキュメンタリー映画作家たち』を開催。毎日異なるテーマでの上映に、客席は地域の人々や作り手でにぎわった。「拠点を持つってこういうことなんだ!と思いました。いい作品をかければ、人がやってくる。今度はその評判を聞いてまた別の人が企画を持ってくる。そうやって自然と地域につながっていくんですね」。変わりゆく映画文化のなか、映画館は作り手と観客を結ぶ場となっている。

3 映画と出会うきっかけに「音声ガイド」というアート

目が不自由な人にも映画を楽しんでほしい。映画にリアルタイムで音声ガイドをつける「ヨコハマらいぶシネマ」は2009年の6月の発足以来、年間30本ほどのペースで、劇場公開中の映画に音声ガイドをつけ続けている。「僕は映画が大好きなんです。だから映画を楽しむためのお手伝いというか、こんないい映画があるんだよって紹介する気持ちでやっています」と語るのは代表の鳥居秀和さん。

活動の拠点であるシネマ・ジャック&ベティでは毎月、音声ガイド付上映を開催。希望者は受付で小型ラジオを借り、特定の周波数に合わせることで音声ガイドを楽しめる。映写室で字幕の内容や画面に映っているものを読み上げながらも、鑑賞者が想像する余地を残した解説を行う。カメラワークや編集から、映画に流れているリズムやムードをどう読み取るか。説明をしないことで伝わるものもある。「このときカメラは何を撮ろうとしているのかを見極めて、こうきたらこう打ち返す。映画とセッションしてるような感覚です」。

視覚障害の有無に関わらず自由に語らう、上映後のお茶会も大人気だ。「映画には人生を変える力がありますよね」。そんな映画と出会う入り口が、このまちにある。

4 文化とビジネスの間で育つ映画という表現

日本での映画文化発祥の地ともいわれる横浜で、地元密着型の映画館を多数運営してきた福寿祁久雄(ふくじゅきくお)さん。初めて映画館の運営に携わったのは高校生の頃。叔父に誘われて藤棚中央劇場からスタート。以来横浜日劇や横浜名画座(現在のシネマ・ジャック&ベティ)・関内アカデミーなど、60年間で関わったスクリーン数は12を数える。

テレビが普及し始めていく中、時代に逆行しているように思われることもあったという。「ただ自分の仕事をまっとうしただけです。農業と似ているかもしれませんね。欲張らずに、この土地にあったものを見つけて、耕していくしかないんです」。

映画館を運営していた頃から現在まで、上映会も多く企画してきた。映画は産業であると同時に、芸術であると福寿さんは語る。「情報があふれる社会になって、流通の波の中に消えていってしまう作品も少なくありません。どんな映画も、きちんと観客に届かなければなりません。まずは文化環境を整えていかないと」。作り手から観客へ映画が届くそのプロセスには、文化を守る多くの人の思いがある。

P.3左　中区・横浜シネマリン 代表 八幡温子さん
P.3中　中区・シネマ・ジャック&ベティ
P.3右　福寿祁久雄さん

ヨコハマアートサイト 2016

【企画名】ヨコハマアートサイト2016キックオフ・ミーティング　【会場】YCC ヨコハマ創造都市センター(中区本町)3F　【主催】ヨコハマアートサイト事務局

25団体が市内各地でアートな取り組み

地域課題の解決につなげる文化芸術活動をサポートするため、文化芸術の持つ創造性をコミュニティやまちの活性化と結びつける文化芸術活動や、横浜の個性ある文化芸術を市内外へ発信する活動を広く公募し、支援する横浜市地域文化サポート事業「ヨコハマアートサイト」。今年度は25団体が参加し、7月から1月まで市内各地でアートな取り組みを行っています。

今年度も事業スタート前に開催したキックオフ・ミーティングでは、参加団体が集合し、それぞれの活動を紹介。短い時間ながら、地域の特色を捉えた活動の様子から横浜というまちの多様性に改めて驚かされる場となりました。各団体の事業についてはウェブページをご確認ください。

ヨコハマアートサイトでは、助成金の交付だけではなく、地域文化に興味のあるすべての人へ向けて、横浜というまちでアートと地域の関わりについて考える・交流する場「アートサイトラウンジ」を開催しています。10月15日からは、異なるテーマで全3回の連続シンポジウムを予定。NPO法人スローレーベルによる「地域に暮らす多様な人の出会いと協働の機会を創ること」を目指す学びのプログラム「SLOW ACADEMY 実践シリーズ&ヨコハマ・パラトリエンナーレ準備連続講座」や、金沢区の工場や社屋といった空間を活用したアーティストネットワーク+コンパス「会社まるごとギャラリー2016」との連携のほか、「こころに響く打楽器作っちゃおう」と題してコンサートや手作り楽器づくりを通して横浜の子育て環境にアプローチするNPO法人打楽器コンサートグループ・あしあとと共にアートの切り口で横浜の現在を見つめます。

地域文化の風景

9 身近な場所で聞く コンサートで繋がる アートとまち

永田美幸さん
（旭区民文化センター サンハート）

旭区は横浜市のなかで最も高齢者が多い区です。そういうこともあってか、旭区民文化センター サンハートはシニアのお客様にも多くご利用いただいています。

最初、旭区で働き始めたときは、芸術にご興味のある方が、比較的少ない地域性のように感じました。やはり、著名な方が出演するイベントには集客力があります。どうやったらそれと同じように、もう一歩踏み込んだ芸術文化を体感しに来る人が増えるのだろう…と考えていました。

そんな中、昨年開催した、サンハート開館25周年事業「アンサンブルフェスティバル」がきっかけで、今後、旭区の文化・芸術の発展を後押ししてくれそうな場所を、たくさん見つけたんです。アンサンブルフェスティバルでは、当館のホールでの公演だけでなく、旭区内の様々な会場でアウトリーチコンサートを行いました。企画段階で演奏会場を探していたとき、サンハートからの声掛けに、鶴ヶ峰にある自家製焙煎珈琲店「陽のあたる道」や、心の病がある方の作業所として運営している、喫茶「ゆいまーる」、脳卒中や脳外傷などによる中途障害者が生活訓練をされている『フェニックス旭』、希望ヶ丘でシェアキッチンという取り組みをされている「マナハウス」など、区内8か所の会場が応じてくださいました。こんなに賛同してくださる人がいるという嬉しさがありましたし、各会場の皆様が、限られたスペースや設備のなかで、コンサートを成立させようとしてくださって、とてもありがたかったです。おかげで多くの来場者にも恵まれ、当館の公演にいらしたお客様がチラシをみて、他の会場のコンサートに行かれたという話も伺いました。こうした活動を通して、身近な場所での文化芸術イベントには需要があることを体感しました。

それから、当館の演劇ワークショップに、旭区の歴史と文化を題材に物語を作り、語り部となって発表する講座を設けているのですが、これに向けて、旭ガイドボランティアのご協力のもと、大池町にある、こども自然公園でのフィールドワークも開催しました。園内には横浜市が指定した天然記念物・ゲンジボタルの生息地や、唱歌・めだかの学校の作曲者・中田喜直が旭区在住だったということで、それにちなんだ歌碑があるんですよ。参加者はみんな一生懸命メモをとっていて、この地域の魅力を学んでくださいました。

今後、二俣川駅にJR・東急線が乗り入れてくるということで、駅の南口が再開発されているんです。大きなマンションの建設工場も始まっています。新しい住人も増えるでしょうし、今後ますます、文化芸術に関心を持っている区民の方が増えていくようにお手伝いできればと思います。

事務局うろうろ日記

ヨコハマアートサイト事務局は、今日も、横浜市内のあっちこっちへうろうろしています。

10 7月14日（木）

横浜市指定無形民俗文化財である戸塚区・八坂神社のお札まきに参加。女装した男衆が踊り、五色の神札を撒き散らしている。「ア、油断をすると、ア、お札を拾えぬぞ」とはやし立てると、一斉に老若男女が空を舞う小さなお札に手を伸ばす。取れても取れなくても楽しい。まちをぐるりとまわって、最後は舞台上にのぼってもう一度。

11 8月2日（火）

青葉区・横浜市民ギャラリーあざみ野へ。駅から少し歩いただけで汗だくになった。「あざみ野こどもぎゃらりぃ2016」を見学。親子のフリーゾーンでは子どもたちが手足に絵具をつけて、スペース全体をキャンバスに仕立てあげている。帰りがけに、ロビーに出店していたアートワゴンでハーブを購入。ラベンダーのいいにおいがふんわり。

12 8月3日（水）

都筑民家園の帰りに横浜市歴史博物館にて「よみがえる学校の文化財」展。小学校の資料室にある生活道具や農具、学校備品を整理・タグ付けし、資料室をプチ博物館に変えようという粋な試み。資料室に残された道具からは、その土地がたどってきた歴史が垣間見える。ずらりと並んだ千歯こきをアイドルに見立てたSBK48の姿は圧巻。

13 8月28日（日）

樽町公園を向こう岸に見ながら鶴見川の土手を歩き、住宅街に降りると「スタジオクロちゃん」がある。小ざっぱりしたアトリエには賞状やトロフィーが飾られていて、作品が生み出された稽古場の重みを感じる。きょうは連続上演企画・家内工場「遠泳」シリーズの『太陽』。男女デュオの真摯なダンス。開け放たれた窓からは蝉の声。

ヨコハマ アートサイトとは

横浜市地域文化サポート事業。地域課題の解決につなげる文化芸術活動をサポートするため、文化芸術の持つ創造性をコミュニティやまちの活性化と結びつける文化芸術活動や、横浜の個性ある文化芸術を市内外へ発信する活動を広く公募し、支援する事業です。

事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局
（STスポット横浜、横浜市文化観光局、横浜市芸術文化振興財団）
〒220-0004 横浜市西区北幸
1-11-15 横浜STビル 208
（NPO法人STスポット横浜
地域連携事業部 内）
TEL:045-325-0410
FAX:045-325-0414
WEB: http://y-artsite.org
MAIL:office@y-artsite.org

@Y_Artsite

ヨコハマアートサイト

ヨコハマアートサイトに関することを中心に、横浜市内のさまざまな地域文化活動について発信します。

季刊ヨコハマアートサイト Vol.009

発行　ヨコハマアートサイト事務局
編集　NPO法人STスポット横浜
テキスト　小川智紀　池田友実　沖崎美海
デザイン　相澤事務所
撮影　福井裕子　菅原康太
印刷・製本　合資会社 三島印刷所
発行日　2016年9月30日

季刊誌についてのご意見・ご感想もお待ちしています。